かと思います．

最後になりましたが，遠路はるばる参加された講演者と研究会議運営に当たられた諸氏に深く御礼申しあげます．　(Akinobu Nakazono 中園明信)

魚類の染色体と進化

国際魚類研究会議の最終日，8 月 3 日午前，第 2 会場において，"魚類染色体" に関するシンポジウムが行われた．

大平洋・インド洋魚類国際会議に，染色体部門が入ったのは最初のことで，当初参加者があるかどうか心配されたが，7 題の研究発表（印度 1 名，タイ 1 名，韓国 1 名，中国 2 名，日本 2 名）があった．発表は淡水魚関係が多かったのは，特に中国，印度などでは淡水魚の種類が多く，研究が淡水魚一辺倒の感をうける現状が反映されたためであろう．シンポジウムは，発表 1 人 20 分，討論 5 分で進められ，中間に 10 分の休憩をおいた．しかし最終日ということもあって，休憩のまま会場に戻らない人があって，後半は室内が多少閑散となったのは残念であった．英語による発表は，アメリカなどの英語国からの参加者がなかったこともあって，表現力や理解力が乏しく，国際会議としての機能が十分果たせなかった感じをうけた．

シンポジウム 7 題の内，注目されたのは中国 Liu Lingyun の魚類染色体 G-バンド分染法の研究である．女性特有の器用さもあって，美事な染色体像が提示された．腎細胞の短期培養法により，(1) BUdR 50～60 μg/ml，(2) Methotrexate 0.5 μg/ml，(3) Actinomycin D or Mitomycin D を作用させ，伸長した染色体上に G-バンドを検出する方法で，将来染色体研究にたいへん有用な方法になるだろう．

国際魚類会議の中の染色体部門は，今回がはじめての試みであったため出席者も少なかったが，今後はさらに研究者も増え，発表も多くなることが期待される．また国際魚類会議に染色体部門のあることを知らない人が，日本国内でも多数あった．今後，魚類学会や水産学会のみならず，動物学会，遺伝学会，染色体学会などにも予めアナウンスしておくことが必要であると考えている．

(Yoshio Ojima 小島吉雄)

昭和 60 年度第 3 回役員会

昭和 60 年 7 月 10 日（水）於東京水産大学．

出席者：上野・岩井・阿部・新井・石山・黒沼・高木・隆島・富永・藤田・中村・松浦・丸山．

議事：1．報告事項，2．前回記録の確認，3．「国際会議」について組織委員会より報告を受け，検討した．4．宍道湖・中海の淡水化中止を求める要望書の文案を検討した．5．その他．

編集後記・Editorial notes

国際魚類会議は成功裡に終了しました。本号の会記で述べられているように，外国の研究者も多数参加しました．参加者の多くが研究成果を国際会議の Proceedings に投稿し，論文数は約 100 に達しました．この編集作業が現在おこなわれています．このため，魚類学会の編集幹事も連日 Proceedings のすみやかな出版にむけて努力しています．もちろん，同時に魚類学雑誌の編集も円滑におこなわれねばなりませんので，本号の編集は多紀保彦編集幹事の全面的なご協力をお願いしました．

(KM)

訂　正・Errata

魚類学雑誌 32 巻 2 号に以下の誤りがありました．お詫びして訂正いたします．

図書紹介・New publications: Page 271，右最終部分に (Toru Taniuchi 谷内　透) を追加．

Japanese Journal of Ichthyology, 32(2), Sano and Moyer: Page 240, left column, second paragraph, 4th line, delete "intraspecific".